

税理士の ひとりごと

No. 104

泣いても一生、笑っても一生

税理士 齋藤明

先日まだ小さい子供を持つ知り合いの女性税理士さんが、「家事と仕事に追われて毎日忙しい」とこぼしていました。確かに繁忙期に、「もう少しキリの良いところまで仕事をしてから帰りたいたい」と思いながら、「でも子供がお留守番しているのだから、そろそろ帰宅しないと」と帰り支度をしなくてはならないというのは、さぞかし歯がゆいことでしょう。

その一方で、今、私がしたくてもできないこと、どんなに望んでも叶えることのできない願望は、子供と一緒に同じ食卓を囲んでご飯を食べること。それがたとえお惣菜のコロッケと味噌汁だけの夕飯だって良いのです。子供の学校での出来事や友達の話を楽しそうに話す顔を見ながら食べるご飯はどんなに美味しいことだろうか、と思うのです。

今から20年前、我が家は狭いアパートで家族4人がぎゅうぎゅう詰めにな

って暮らしていました。当時、薬剤師で私よりも稼ぎの良かった妻がフルタイムで働き、税理士試験も科目合格者で安月給だった私が専業主夫をして、毎日私が夕飯をこしらえて、「お母さん、今日は帰りが遅いね」なんて子供と話をしながら夕飯を食べていたのです。

確かにあの頃は経済的にはあまり豊かではありませんでした、今にして思うと、私の最も幸せな時代だったような気がします。それも今となっては、ただただ楽しかった思い出しかありません。

近頃では、テレビをつけるとウクライナ情勢のニュースばかりが流れています。総動員体制が敷かれたウクライナでは18歳から60歳の男性の出国は禁じられており、隣国との国境に向かう列車の発着する駅のホームで自分だけが祖国に残り、妻や子供を国外へ送り出す男性の姿が映されていました。家を爆撃で失い、ただ生き延びることさ